# 車輪の唄

藤田迷路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
車輪の唄

【Ｎコード】
Ｎ３７６５Ｃ

【作者名】
藤田迷路

【あらすじ】
旅立つ日に自転車は悲鳴を挙げて僕らを未来へ運んで行く。ＢＵＭＰの９ｔｈシングル／２ｎｄアルバム『ユグドラシル』ｔｒａｃｋ８の『車輪の唄』を基に書いた歌詞小説。

## 〔1〕（前書き）

妄想の類ですので見解に大差小差ありましょうが、どうか寛大な目で読んでやってください。

## 〔1〕

まだ朝靄の残る道を滑るように自転車は走り出す。　ペダルを漕ぐ度に錆びた悲鳴が静かな住宅地にうるさかった。

距離にして十数メートルの通い慣れた道も、母の帰りを待った公園も、今日はどこか違っている気がした。

角を曲がると、薄く残る不十分に丸い月を見上げている彼女が見えた。長い髪が薄明かりの中でも綺麗なのがわかる。　自転車の悲鳴が既に聞こえていたのか、彼女はすぐに僕に気付くと胸の前で小さく手を振った。

パーカー姿に皺くちゃのスカート。足元はコンバースのスニーカー。身体に似付かない大きな鞄がやけに印象的だった。　高校になってから初めて見る私服の彼女に、僕は少しだけ目を奪われていた。

彼女の前で静かにブレーキを握り切ると、ぶっきらぼうに、少し照れながら「よぉ」と挨拶をする。　彼女もいつものように明るく「よぉ」と返す。

「早いね。約束までまだあるよ」

「お前だって」

目は合わせられなかった。

恥ずかしさもあったが、彼女の大きな決断を前にした、自分自身への後ろ暗(めた)さがあったからかもしれない。

「見て見て。月が淡くてキレイなの」

久しぶりに会ったのにも関わらず、彼女はあの頃のまま僕に接した。

それが少し心地良くて僕は月を見て、微笑んだ。
美しい月が、二人の間にそんな僅かな時間を生んだ。　時間にすれば一秒にも満たない沈黙。それすら僕は耐え切れず、自分の作った微笑みさえ打ち消すように、またぶっきらぼうに「行くか」と言った。
彼女は笑顔で小さく頷くと、そこが自らの定位置であるかのように、すんなりと荷台に着いた。
横乗りに座る姿もあの頃のままで、懐かしさが込み上げて来る。
漕ぎ出すペダルが重い。
バランスが取りにくかったのは彼女の大きな鞄のせいもあったが、久しぶりに乗せた彼女が女になりつつあることに、少なからず戸惑いを覚えたことも影響していたのかもしれない。

こうして二人で自転車に乗るのは何年ぶりだろう。
中学に上がってからは昔のように二人で遊ぶこともなくなったし、意識的に彼女を避けるようになったのは、思春期で単に恥ずかしくなったことも多分に影響していたんだろう。
だが、自分の中の気持ちの変化には気付かない振りをしていただけかもしれない。
高校になってからは通う学校が別々の方角にあったこともあり、彼女とはより疎遠になった。
それが突然、電話で今日のことを一方的に約束してきたのは一昨日のことだった。

二人分の重みのせいでより大きくなった自転車の悲鳴は、眠りから目覚めたばかりの町によく響いた。
いつもなら通勤の人が足早に過ぎる駅へと続く商店街も、日曜で人影は疎らだ。仕入業者のトラックだけが道路のあちらこちらに見

て取れる、そんな何気ない光景さえも今は思い出に変わろうとしているのか、車のナンバーも鮮明に頭に入って来た。
自転車を漕ぐ度に体温は上がるものの、それ以上に風が冷たかった。

「寒い？」

「いや、大丈夫」

彼女のタイミングの良すぎる質問に驚いた。　正直、剥き出しの手と頬がかじかみ、鼻水が出そうだった。
ふと彼女が身を寄せて来たのを背中に感じた。
戸惑い、どうしていいかわからないまま身体が強張った。
それでも、しばらくするとじんわりと彼女の温もりが伝わって来る。僕は背中越しに彼女の存在を確かに感じ、ふわりと安心すると、身体がほぐれていくのがわかった。
そんな彼女の無言の優しさが嬉しかった。
二人でいることが久しぶりで話したいことは山ほどあったが、言葉は口の中で潰え、彼女からの話に対して素っ気ない返事に終始してしまった。話の内容はほとんど覚えていない。
自転車は商店街を抜けて大きな右カーブに差し掛かり、その先にはあの坂が待っていた。

## 〔2〕

商店街を抜けた大きな右カーブを曲がると、線路沿いに緩やかだけど真っ直ぐで長い坂道が続いている。　坂を登り切れば駅まではすぐだけど、この坂が一番の難所。

歩くだけでも頂上に着く頃には息が切れる不親切なこの坂の上に、何故駅舎を造ったのか私は当時の人に聞いてみたい気分だった。

勢いをつけて坂に差し掛かると、私は自然と彼の腰に腕を回してバランスを保った。　見た目ではわからなかった意外にもしっかりした身体つきに少し驚いたが、それ以上にさっきよりも強く身体を硬くした彼が可笑しくて仕方なかった。

私はこの坂が好き。いつも彼が登り切れるかを密かな愉しみにしていた。

彼は口を真一文字に結びこの坂に挑んでる。次第に呼吸が多くなってくる。

「重くなったでしょ。降りようか？」

「……大丈夫」

「ホントに？」

「……大丈夫」

「降りて押すよ？」

「……うるさい」

この「うるさい」も私の愉しみのひとつだった。くだらないこと

を聞いては苦しむ彼の怒る横顔を愉しんでいた。　今でもこの言葉を聞くと自然と笑みがこぼれてくる。

この坂の中腹には踊り場のように平坦になっている場所がある。そこを境に坂はさらに傾斜を増している。　その横の小路を右に入ると、子供の頃によく買いに来た駄菓子屋があるけど、今では更地になっていてその影はどこにも見られない。

その頃も、彼は今日と同じように私を荷台に乗せてこの坂に挑んだ。途中で足を着くとお菓子をひとつ奢らなければならないのが私たちの中のルールだった。

そして、今日も私はひとつ自分の中で賭けをしていた。今日、請求するものはお菓子じゃない。

自転車がその踊り場まで来ると彼が大きく息を付いた。

「少し休む？」

「……いや、いい」

期待半分に声を掛けたが、彼が強がって見せたことは明白だった。不意に彼の強がる癖を思い出した。

一緒に遊んでいたとき彼が転んで腕を強く打ったことがあった。彼は「大丈夫」と言っていたが、次の日に三角巾で腕を吊って学校に現れたときは本当に驚いたものだった。

でも、今の声には一本の芯のようなものも感じたし、漕ぐ足も休めてはいない。

彼は少しだけ整えた息を短く強めに吹き出し、またすぐに力強くペダルを漕ぎ始める。　彼の足にさらに力が篭り、背中は熱を帯びているのが冷えた服の上からもわかった。　自転車は停まらない程度の速度で、やや蛇行しながら頂上へと向かう。彼の息遣いがさら

に荒くなる。

「もうちょっと。あと少しだよ」

私は心で彼が足を着くことを期待していたけど、わざとらしすぎない程度に無邪気に、気持ちとは裏腹な声をかけた。　彼は無言でペダルを踏み込む。

私はそれ以上何も言わなかった。この坂を、私の賭けの勝敗を彼に預けようと思った。

自転車は私の期待を裏切って、あと僅かで頂上に到達しようとしている。

朝の静けさの中に彼の息遣いだけがリズミカルに響く。ふと振り向くと、坂の下に見える町並みが陽光を浴びて眩しい。

子供の頃はここが世界で一番高い場所だと信じて疑わなかった。

「世界中に二人だけみたいだね」

不意にそんな言葉がこぼれていた。自分でも意識はなかった。

一台の車が彼の息遣いとすれ違う。

視線を戻すと、彼の肩越しに明けた空が坂道の延長のように大きく拡がっていた。

## 〔3〕

この坂は必ず登り切ると電話をもらったときから心に決めていた。子供の頃、中腹の駄菓子屋まで登り切れないと奢らなければならないルールが二人にはあった。　登り切れないと彼女がけらけらと笑うのが好きで、わざと足を着いたこともあったことは、今でも秘密のままだ。

そのルールが今でも生きているとは思わなかったが、それでも胸のどこかで足を着けばまた何かを奢れとせがんでくるのではないか。ならばそれのほうがいいのではないか。それはまた会う口実が出来ることなのではないか。

そんな逡巡が途中ペダルを踏む足を少しだけ鈍らせたが、今回は登り切りたいという気持ちのほうが勝(まさ)った。

坂の上で自分の決心への成果を刻むように足を着いた。大きく上下する肩と上気した顔がこの坂そのものを物語っていた。

だが、その荒い呼吸さえも押さえ込むように、頂上で途切れた右手のブロック塀から、それまでのひんやりとした空気を一蹴する金色の光が全身を照らし出していた。

思わず息を呑んだ。今まで見たこともないような圧倒的な空。まるで未知の世界への扉を開けたような感覚だ。昔、映画で観たＵＦＯとの遭遇シーンがちょうどこんな感じだったことを覚えている。

凛と張り詰めた静けさの中で、陽射しの音までもが聞こえてきそうだった。

ふと後ろで息を呑む音が聞こえた気がした。腰の位置にあった彼女の手は、いつの間にかほどけていた。

一瞬、心臓がとくんと跳ねる。

数分は見取れていたのかもしれない。　身体が陽射しを吸収するのを待っているかのように互いに何も言わず、ただただあまりにも綺麗すぎる目の前の光景を通じて、お互いを見ていたのかもしれない。

僕は彼女が何気なく言った「世界中に二人だけみたいだね」という言葉を噛み締めていた。

突然の沈黙は、僕に沈黙しているということすら感じさせなかった。　沈黙を気付かせたのは彼女の衣擦れと、自転車のガチャガチャとした音だった。　彼女が僕の肩に手を掛けて背中にのしかかるように身を乗り出したので一瞬バランスを崩しかけたが、まだ坂の感覚が残る左足に踏ん張りを効かせた。

二人は光と対峙していた。

きっと彼女は笑っていただろう。彼女の心動が手を通じて、背中を通じて僕の中に入ってくる。

ふと光に照らされた彼女の顔を見たい衝動に駈られた。あの笑顔が変わっていないか確かめてみたかった。

だが、僕は光からも、衝動からも顔を背けた。アスファルトに描き出された二人の明確な影は、互いを支えあうように重なり合う。

彼女の影は笑っているようにも泣いているようにも見えた。

僕は泣いていたみたいだ。いつの間にか頬に冷たさが通った。

涙が流れされていたと言ったほうが正しいかもしれない。

哀しいわけではなかった。辛いわけでも、痛いわけでもなかった。

でも涙が出た。

拭うことはしなかった。その動作で泣いたことがばれるのも嫌だったし、この涙は特別な気がして流れるに任せていたかった。

一台のトラックが視界を一瞬遮った。それがきっかけだったのか、彼女の身体がそっと離れる。

僕は振り向かないよう盗み見ながら、彼女が座り直したのを待って、静かに自転車を漕ぎ出した。

三叉路を右に行けば駅まではなだらか下り道が続く。　少しだけスピードを出して涙を乾かすと、疲れはどこかに消え失せていた。

## 〔4〕

がらんとした駅舎の中に窓からの陽光が床にくっきりとした四角い日だまりを落としていた。構内の天井は高く、駅員の咳払いだけがよく響いていた。

改札の右手には古びた券売機が二つあり、その一つには発券中止と書かれた貼紙と、硬貨投入口にガムテープが貼られていた。

少し前に来た時も同じように紙が貼られていた記憶があるが、何の問題もないのだろう。

隣町へはバスほうが利便性が高いため、元々利用者は少ない駅だ。

今は乗客よりも駅員のほうが多かった。

「先に買うね」

彼女が切符を買う間、僕は後ろでふと券売機の上に備え付けられた行先案内板に目を遣った。

目的地は一番端の駅。名前だけは聞いたことあるが、その街のことを僕はよく知らない。

数えれば駅数は十にも満たない距離、時間にしても一時間とかからないが、僕にはまだ見ぬ未開の世界のような気さえする街。「近くて遠い場所」そんな台詞がぴったりな場所だった。

券売機に目を戻す。後ろから見る彼女は中学生と言っても通用しそうなほど華奢（きゃしゃ）な身体をしていた。

彼女は同年代の子に比べれば背も小さく外見も幼いほうだが、子供の頃から言動には大人びたとこがあって、僕はそんな部分に嫉妬を覚えたこともあったくらいだ。

決断の早さもそのひとつだった。

一昨日、今日のことを伝える久しぶりの彼女からの電話に戸惑うよりも、その決断に言葉を失った。

僕はこの町で生まれ、この町で育ち、この町で学び、この町で仕事をし、この町で家庭を持ち、この町で死ぬんだと漠然と思っていた。

そんな僕の頭の中に、彼女の決断は大きな石を落とした水面のように波立たせ、その波紋は日を増すごとに同心円状にどんどん大きくなっていった。

その中心にあったのは間違いなく彼女の存在だ。

彼女という存在が僕に何らかの影響を及ぼしたことは確かだ。それは今に始まったことではないかもしれない。

あの日のあの坂の約束から、僕は彼女という存在に影響を受けていたのだ。

「どうしたの？」

「…なんでもねぇよ」

小さな背中が振り返ると、僕の視線を不思議に思ったのか小首を傾げた。　僕は慌てて視線を逸らすと、一歩踏み出した。

券売機に向き合うと金額ボタンの一番端にさっきの駅名はあった。高かった。財布を覗くが、今の所持金ではとても行けそうにないのが悔しい。

僕はその中でも一番安い入場券のボタンを押すと、少しして入場券が音もなく滑り出て来た。

入場券なんてものがあること自体、今日初めて知った。それでも今は、少しでも長く彼女といるための文字通り切符だ。

それを僕はすぐに使う、使わなくてはならないのにも関わらず大事にポケットに入れると、そっと握り絞めた。

## 〔5〕

一昨日の夜、慌てて買いに行ったときに一目で惚れて、サイズは少し大きかったけど迷わず購入した鞄に旅仕度を詰め込むと、やはりもう一人分入りそうな余裕があった。

「今度帰るとき、少しは重くなってるのかな」などと一人ごち、旅立つという言葉を自分の中で反芻しながら、電車の時刻を再度確認した。本数は多くないので遅刻は禁物。

父に車で送ってもらおうか。

そんなことに思いを巡らしていると、ふと彼の顔が頭に浮かんだ。うるさい、錆びたあの自転車も。

「もう一度だけあの自転車に…」

そんな言葉が頭に浮かんでは消えていた。

何回目に浮かんだときだろうか。私は携帯電話に手を伸ばしていた。

だけど、すぐにはかけられなかった。躊躇(ためら)いもあったことは確かだけど、私は彼の携帯の番号を知らなかった。

自然、彼の家に電話した。何年ぶりかもわからないがそこに躊躇いはなく、いつもの習慣のように指は番号を覚えていた。

すると意外にも彼自身が出たので、途端に狼狽(ろうばい)した。顔が上気し、昂揚していく。

電話を切りたくなる衝動を抑えて言葉を探した。

「あ、あたし」

「…おぉ」

「久しぶりだね」

「…あぁ」

鼓動に身体が耐えられなくなる。　鼓動が電話越し聞こえやしないかと、携帯電話を右手に持ち替えたりもした。

彼の母親には以前に話はしていたので、私はすぐに本題を切り出すことにした。

声は平静を保とうとして少し上ずってしまった。

「…あのさ、明後日なんだけど駅まで送ってくれないかな？」

「何で」

無愛想な返事に心臓が握りつぶされそうな感覚が全身に伝わっていく。

今すぐにこの電話を切ってしまいたかった。

「…最後だからいいじゃん」

やっとの思いで搾り出していた。

「最後？」

「そうだよ。最後なんだよ…」

「どっか行くの？」

どこか要領を得ない彼を訝(いぶか)しく思い、半ば呆れながら手短に内容を伝えると受話器越しに唾を飲み込む音が聞こえた。

話は伝わっていると思っていたけど、彼の反応はそうではなかった。
彼は「そっか…」と言うと少しの沈黙した後、「わかった。明後日な」と告げた。
無知による彼の言葉に合点がいき、安堵が頭の先から全身へ駆け抜けた。
私は口早に待ち合わせ時間を告げると逃げるように電源ボタンを押した。
私は大きな息を強く吐き出した。鼓動はまだ余韻を残している。
気が付くと手が痛くなるくらい携帯電話を握り絞めていた。

改札を抜けようとすると、鞄を引っ張られ身体が後ろにのけ反った。 何かと思い振り向くと、大きな鞄が仇となり改札に紐が引っ掛かっていた。
彼は改札の前でポケットに手を入れたままこちらを見ていた。
私はあまりにも無様な姿を晒したことに罰が悪くなり、外そうと紐を引っ張るが外れない。 恥ずかしさに任せて紐をがむしゃらに引っ張るけど、鞄は本当の私の気持ちを表すかのように改札を放そうとしない。
自分の滑稽な姿と、心理を見られた気がしたことに恥ずかしさは頂点に達し、窺うようにちらりと彼を見た。
この紐が彼の手だったら私の決心は脆くも崩れ去っていたかもしれない。しかし彼はその視線を自分への催促として捉えたのか、黙って頷くと頑なに引っ掛かる鞄の紐をそっと外してくれた。
そんなつもりはなかった。
彼に少し悪い気がしたけど、それ以上に彼の優しさが照れ臭く「ありがとう」は喉の奥で止まっていた。

## 〔6〕

線路に挟まれたホームは屋根もなく、真ん中にベンチが一脚あるのみの質素なものだ。　ベンチには家族旅行だろうか。両親に手を引かれた女の子が抱くクマのぬいぐるみの愛らしさが、吹き抜ける風をより爽やかにしていた。

失われていく時間に僕は何も出来ずにホームに立っていると、電車の到着を知らせるアナウンスが流れた。　線路の先を見遣ると、もうじきに迫る別れを乗せた赤い車体が近付いて来るのが見える。

「ねえ、聞いてる？」

「あ、……あぁ」

落ち着いていられなかった。焦れば焦るほどに伝えたいことは気泡のように浮かんでは消えていく。　彼女が目に付いたものを話題にしていたが、ぶっきらぼうな相槌さえ上の空だった。

彼女は線路を挟んだ向こうの景色を眺めていた。長い髪がそよ風に僅かに揺れている。彼女の視線を追うように見た空はとても広い。

彼女が溶け込んだ淡い風景の中に、赤い車体がけばけばしくホームに滑り込んで来る。　途端に現実を目の前に突き付けられようで、僕は思わず上体を反らした。

降車客はいない。それがなおさら沈黙を強調したが、今度の沈黙には抗いようがなかった。

ドアは彼女のためだけのように開け放たれている。

同時にそれはタイムリミットの始まり。沈黙の中、彼女は躊躇いながらそっと一歩を踏み出した。

その一歩は、何万歩よりも距離のある一歩。　僕にとっても彼女にとっても終わりへの一歩であり、始まりへの一歩。

彼女が僕に向き直る。僕らは今日初めてちゃんと向き合ったことに気付いた。
僕は彼女の目を見据え、彼女も僕の目を見据えたが、鼻の奥を何かが刺激するのがわかり、すぐに視線から逃げた。我ながら自分の意気地のなさに辟易した。
車体とホームの隙間が奈落へのクレバスにさえ見えた。視界に映った彼女のスニーカーの紐が縦結びだ。
互いに何も言葉を発しないまま発車のベルが最後を告げる。タイムリミットだ。
電車のアイドリング音とベルでざわつく中、彼女が口を開いた。

「約束だよ。必ず、いつの日かまた会おうね」

いつもならぶっきらぼうに「あぁ」とでも言うところだが、今はその「あぁ」さえも言葉はならず、車体とホームの隙間に呑み込まれていく。
口から出ない言葉が鼓動になって胸の内側を強く打つ。　僕は俯いたまま小さく手を振って応えるので精一杯だった。
ベルが止み、圧縮空気と共にドアが僕らを遮断した。
その音を聞いて今更になって彼女のちゃんと顔を見たが、ドアのガラスに反射した僕が僕の邪魔した。彼女の口元の微かな笑みをだけが、辛うじて見て取れた。
それを見た瞬間、僕は身体に絡まる糸を振り払うように、階段に向かって走っていた。
強く噛み締めていた下唇が痛んだ。

一人ホームに立っていた。あの日と同じ場所。ポケットに入れた手で入場券をそっと握る。

ここからの景色もだいぶ変わってしまった。乱立したマンションは空を狭くした。

この町もベッドタウンとしての生まれ変わり、駅の利用客も以前とは比べ物にならないくらい増えた。券売機の貼紙も今はもうない。

あの後、彼女の視線から逃げたことを何度も後悔した。

でも、水の中にいるようにくぐもった周囲の音の中に、彼女の声だけは今も鮮明に耳に残っている。

間違いじゃない。あの時、君は…。

変わらない赤い電車がホームに滑り込んで来た。

## 〔7〕

「約束だよ。必ず、いつの日かまた会おうね」

彼に言いたかったことを、やっとの思いで搾り出したその言葉に集約した。

小刻みに震える手を振った。彼は見てない。でも振った。　俯いたまま彼も少しだけ手を振っていた。

無機質なドアが二人の間に割り込んだ瞬間、彼が私を見た。

私は精一杯、頬に力を入れ笑った。今思えばとても変な笑顔だったに違いない。

彼は唇を噛み締めると、次の瞬間には階段へと駆け出していた。

呆気ない最後に力無くデッキの壁に寄り掛かった。誰もいなくなったホームの上には雲と淡い月がぽつんと浮かんでいた。

少しの振動が身体を揺らし、電車はゆっくりと動き出す。　電車がカーブを抜けると、足元の日だまりがゆっくりと狭くなり、デッキを薄暗くする。

窓には結局、一言しか言えなかった憎らしい奴が姿を現した。自分への呵責と後悔に耐え切れず、私は思わず視線を落とした。

電車が揺れる度に私の上体は壁から引き離され、また背中を軽く壁に当てた。身体は空気中を舞う鉛のように重い。

車内アナウンスが流れたが何を言っているかは聞き取れなかったし、今、聞きたいのはそんなものじゃなかった。

そのとき、車内アナウンスに混じり一瞬、聞き慣れた音が聞こえた気がした。

咄嗟(とっさ)に窓の外を見るけど期待した姿はなかった。気のせいか…。

耳障りな車内アナウンスが終わる。

また聞こえた。今度は確かに聞こえた。

悲鳴だ。あの聞き慣れた錆び付いた悲鳴。

外を覗き込み、素早く視線を坂の頂上に向けるけど、角度がつきすぎていてデッキの窓からは見ることはできない。
でも必ずいる。確信めいたものがあった。　私があの音を間違えるわけがない。
急いで座席に着いて窓を開けた。周りの乗客が何事かと視線を向けたけど、今は気にしてはいられなかった。
顔ごと外に出した。風に煽られた長い髪が視界の邪魔をするのを押さえて、改めてあの坂を見た。

彼だ。

風の音も、電車のエンジン音も、注意を促す車内アナウンスも何も聞こえず、錆び付いたその悲鳴しか私には届いてなかった。
彼は坂を風よりも速いスピードで駆け降りてくる。閉ざされた私と彼の距離が急速に近くなり、彼の表情さえも見て取れるほどになると、彼の荒い息遣いさえも聞こえてきそうなほどだった。
彼と目が合う。まっすぐ彼を見た。今度は彼も逸らさない。
光るその瞳に心臓は鼓動をさらに早くした。

「　　」

叫んだ。
何も考えていなかった。思うがままに、忘れ物を取り戻すために自分の気持ちをそのまま言葉にした。　彼に言いたかったこと、伝えたかったことを。
彼が笑った。笑ってくれた。彼の口が僅かに動く。
私も笑った。彼に届くように大きく自然に笑った。
電車が加速を始めると、彼の笑顔ともゆっくりと離されていく。
悲鳴は徐々に小さくなる。
でも、さっきまで私たちの間に横たわっていた永遠にも似た距離

は消え失せていた。
彼の笑いが私の中にある。それだけでよかった。
彼が見えなくなるまで手を振った。　もう手が振れなくなっても構わないほど手を振った。

## 〔8〕

自転車が壊れても構わない。そう思った。
今この瞬間に全ての力を出し切るように坂を一直線に下る。　ハンドルは今にも音を立てて壊れそうなほどぐらつき、足は自分の足じゃないようにペダルを漕いでいる。
今はただ彼女に追い付くためだけに、この自転車はあった。
窓から彼女が顔を出したのが見えた。視線が絡まる。
彼女の口が開く。

「　　」

つんざくような悲鳴の中、心のどこかで聞きたかった、でも意外な言葉が聞こえた。
素直に嬉しかった。
僕はそれに応えるように笑う。自分でも恥ずかしいくらいに笑った。心から出た笑いだったんだ。
自分でもわからないくらい小さく、呟くように同じ言葉を口にした。　きっと彼女には聞こえない。聞こえて欲しくなかった。
でも、彼女には届いていたと思う。　彼女が優しく、でも大きく笑ったから。
自転車は限界を迎えたのか、ゆっくりと彼女が遠くなる。
まだ届く。まだ。まだ。
自転車は断末魔のような悲鳴を挙げる。僕の気持ちに呼応するように鳴き叫ぶ。　ギアも悲鳴を挙げ出した。限界だとしても、もう少しだけ持ち堪えてくれ。
一瞬、自転車が最期の灯のように、彼女に近づいたが坂の終わりが近い。
麓で道は湾曲したガードレールを設けた大きな左カーブを迎え、

線路とは離れていく。
あそこが彼女に近付ける最後の場所だ。
ガードレールの直前、二人の思い出をたくさん乗せた自転車に僕は心で謝りながら飛び降りた。　自転車は大きな音を立てて地面に打ち付けられ、勢いづいた僕の身体は前に転がった。車輪はまだ漕ぎ続けている。
通り掛かった人が駆け寄って来るのがわかったが、すぐに立ち上がりガードレールに飛び付くと、遠ざかる電車向けて声の限りに叫んだ。

「約束だよ！必ず！いつの日かまた会おう！」

恥ずかしさも、周りの目も気にせず叫んだ。もうこの想いはこうするしかなかった。
僕は離れていく彼女に見えるように全身で大きく手を振った。電車が見えなくなるまで振り続けた。
やがて、ざわつき出した町で一人の世界が訪れた。

ドアが開き、降車客が駅を賑わせていた。　俺は相変わらず古びたままのベンチに腰を下ろし、タバコに火をつけた。
こうして開かれたドアの前にすると、あの時の記憶が甦る。
結局、連絡先すら聞けず仕舞いで別れてしまったあの日。　恐らく届かないドアの向こう側で、彼女は泣いていたんだと思う。
顔は見られなかったがわかっていた。ベルの中に聞いた彼女の声は震えていた。　その声を聞いただけで身体が熱くなって、俺は応えることができなかった。
今更ながら照れ臭くなり、視線を落とした。真新しい皮靴がまったく似合ってない。
ホームのざわめきが収まりつつあったとき、不意にスニーカーの

足が視界に現れた。縦結びのスニーカー。
僕は何故だか嬉しくなって、ゆっくりと顔を上げた。
逆光が、短くなった髪型を浮かび上がらせていた。

## 〔9〕

町は朝の静けさを過ぎ、昼の長閑（のどか）な喧騒を迎えようとしていた。
僕は傷付いた自転車を押しながら商店街を歩いていた。行き交う人がみすぼらしさに輪を掛けた自転車と僕に視線を向けるのが分かる。
すぐに走り抜けてしまいたかったが、まだペダルを漕ぐ気力はなかった。
賑い出した町の声が大きくなる。だが、車の通り抜ける音も、町中の雑踏も、子供の笑い声も、水の中にいるようなくぐもった音にしか聞こえない。
ざわめきが僕を一人にする。

「世界中に一人だけみたいだな…」

視線を落とし吐息混じりに一人ごちた。　その言葉の中に無意識に彼女がいたことまでは気付かなかった。　真上から降り注ぐ陽射しが、アスファルトのガラス骨材を星のように瞬かせていた。
交差点の信号で足を止め、ふと見上げた空は青と言うより白に近く、西の空にひとつの雲と淡く不十分に丸い月がぽつんと浮かんでいる。
彼女は空が好きだった。気が付くと彼女はいつも空を見上げていた。　その横顔が僕のお気に入りで、空を眺めるふりをして何度も盗み見ていた。僕が空を好きになった理由はそれだったのかもしれない。
彼女もこの空をきっと見ている。見ている自信があった。
そうだ。僕らはこの空でいつも繋がっていたんだ。そして今も。
彼女は彼女の場所で。僕は僕の場所で。

胸の中ではっきりとした光が瞬いた。

じんわりと町の声が戻って来る。

右肘が疼くように痛いことに、今頃になってようやく気が付いて見ると、擦り剥けて血が滲んでいる。途端に痛みが湧いて来た。

だが、勲章を貰ったような誇らしさがそこにはあった。

僕は少しだけ笑みを浮かべ、肘に付いた砂利と身体の汚れを簡単に掃(はら)うと、曲がったサドルを直して自転車に跨がった。座り心地は頗(すこぶ)る悪い。

何回目かの青信号が点(とも)るのを待って走り出す。少し歪んだハンドルに全身でバランスを取ると、あちこち痛いのに改めて気付かされた。

ひとり残された僕の身体を自転車は滑るように商店街を運んで行く。

でも、一人じゃない。

微かに残る背中の温もりが、僕を一人にはさせていなかった。

朝より大きくなった悲鳴は、今までとはどこか違うように聞こえる。悲鳴ではなく、僕の背中を押す大きな声援のように。

自転車は風を切り、少しだけ蛇行しながら目覚めた町を駆け抜けて行く。

目の前に現れた彼女は、記憶の中の彼女とはだいぶ印象は変わっていたが、心象は何も変わってなかった。

「久しぶりだな」

「うん」

「とりあえず、おかえりって言わなきゃダメか？」

「いいよ。そんなこと」

声も、けらけらとした笑い方も、やっぱり変わってないことに安堵を覚えた。

「伸びた？」

「そんなことないさ」

彼女は僕の頭に手をかざし、自分の頭との距離を計った。　まるで子供の頃、背を比べ合ったように。

思わず笑った。自然に笑っていた。

数瞬、呆気に取られた彼女も同調するように笑った。二人の笑い声が発車のベルの中に拡がった。

今日は話そう。あの日の分まで。

## 〔10〕

疲れた。
ありきたりだけど、今の私を表現するには足りて余りある言葉だった。
帰り道、憧れていた街の喧騒がとても心地悪かった。　短くなった髪がまとわり付くような風を孕(はら)む。
車と人と雑音で埋め尽くされた街は、私に世界中に一人だけのような錯覚を覚えさせた。
ふと胸の中に大切に仕舞ってあるあの町の景色を今に重ねてみる。
涙が出そうになるのを羞恥心だけが止めていた。
私はその足で切符を買いに行った。
失恋がそうさせたわけでも、この街に嫌気がさしたからでもない。
ただ今の私に必要なのはあの町だということ。それだけだった。
空には一等星すら見つけることは出来ず、月がネオンの横に申し訳なさそうに出ていた。

「逃げる」
その言葉が何度も頭を過ぎった。言い訳を探していた。私はこの町に戻る理由が欲しかったんだ。
次第に町に近づくに連れ、胸の中がざわつき出すのがわかった。
あの日、大きな鞄を胸に抱いて顔を埋め、今にも飛び出しそうな感情を奥歯で噛み殺した思い出が、今また首をもたげ出す。　その頃と何も変わらないこの町の青い空は広く、どこまでも届きそうな高さが両手を広げて私を迎えてくれているような気がした。
電車のアナウンスが聞き馴れた駅名を告げる。
言い訳はまだ出来ていない。

「…何かフレーム歪んでない？」

「……ちょっとな」

わかっていた。この自転車の大怪我の原因はあの時だってことを。でも、気付かない振りをして私は荷台から彼に聞いた。　いつも以上に口数を多くしたのは懐かしさもあったが、彼に何故戻ってきたかを聞かれるのが怖かったから。

自転車があの坂にかかる。頂上から見下ろすと、鮮やかな夕焼けが私たちを迎えてくれた。　思わず堪えていた溜息がこぼれた。不味いと思いすぐ口を塞いだけど、静まり返った坂の上ではきっと彼にも聞かれてしまっただろう。

彼が不意に自転車を止めた。横を車が二台続けて走り抜けて行く。

焦りと戸惑いが、私と彼の間に一瞬の沈黙をもたらした。

慌てて言葉を継ごうと口を開きかけたとき、機先を制するように彼が口を開いた。

「…何かあったのか」

何も言えなかった。噛み締めた下唇が溢れそうな言葉を辛うじて塞き止める。俯いた顔は短い髪では隠れなかった。

彼が首だけをこちらに向けているのがわかった。腰に回した手に自然と力が篭る。

彼の次の言葉が怖かった。

だが、次に聞こえたのは変わらないあの悲鳴だった。　動き出した自転車が坂にかかると、つんざくほどの悲鳴を挙げて坂を下った。危なっかしく左右にふらつくから、彼の身体に必死にしがみ付いた。

彼の無言の優しさが嬉しかった。

「ありがと…」

ブレーキ音に掻き消されるように彼の温かな背中に呟いた。
重かった身体が軽くなっていくのが手に取るようにわかった。
私は笑った。大きく。彼も笑う。二人分の笑い声と錆び付いた悲鳴が坂にこだました。
やっぱり私の欲していたのはこれだった。
車輪は唄うように悲鳴を挙げる。
今日は話そう。あの日の言えなかった分まで。
言いたいこと、伝えたいことの前では一秒さえ惜しかった。

「……ねぇ」

「ん？」

「…あとで携帯の番号教えてよ」

「あぁ」

「……フフフ」

「…どうした？」

「なんか今日はよく喋るね」

「…うるさい」

<コ>

## 〔10〕（後書き）

ご精読、ありがとうございました。
ワタクシの初小説。ココに堂々と完成です。

…と言ったはいいんですが、取捨選択がままならず、なんとも長文になってしまい反省しきりです。
既に曲の世界観が完成されているので肉付けに終始してしまい、さらには視点もどっちつかずの感が否めなく、なんとも中途半端になってしまいました。
さらにさらに、歌詞の流れに従ったことから、現在と過去が一頁内にごっちゃになって読みにくかったことも、これまた反省材料です。

今回は“ＰＶのような小説”を書いたつもりです。他にも柔軟に“ＢＧＭのような小説”を書いてみたいと思います。
今後、ＢＵＭＰの唄そのもののように小説同士をリンクさせられればいいかなぁ、なんて思ってます。深謀短慮ですが…。
期待はせずに長い目で見てください。

感想、意見、批評、質問、デートのお誘い。お待ちしております。

人によって曲の捉え方は様々あります。
ですが、この小説がアナタの描く『車輪の唄』と同じであれば嬉しいなぁ。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3765c/

車輪の唄

2010年10月10日16時46分発行